

私たちの二等車には、どの駅からも一人の乗客もなかったし、列車ボーイや車掌も一度も姿を見せなかった。そういう事も今になって考えてみると、甚だ奇怪に感じられるのである。

私は、四十歳にも六十歳にも見える、西洋の魔術師のような風采のその男が、段々怖く  
なってきた。怖さというものは、外にまぎれる事柄のない場合には、無限に大きく、身体中一杯に拡がって行くものである。私は遂には、産毛の先までも怖さが満ちて、たまらなくなつて、突然立上ると、向うの隅のその男の方へツカツカと歩いて行った。その男がいとわしく、恐ろしければこそ、私はその男に近づいて行ったのであった。

私は彼と向き合ったクッションへ、そつと腰をおろし、近寄れば一層異様に見える彼の皺だらけの白い顔を、私自身が妖怪でもあるような、一種不可思議な、顛倒した気持で、目を細め息を殺してじつと覗き込んだものである。

男は、私が自分の席を立った時から、ずっと目で私を迎えるようにしていたが、そうして私が彼の顔を覗込むと、待ち受けていたように、顎で傍の例の扁平な荷物を指示し、何の前置きもなく、さもそれが当然の挨拶でもあるように、

「これでございますか。」

といった。その口調が、あまり当り前であったので、私はかえって、ギョツとしたほどであった。

「これが御覧になりたいのでございましょう。」

私が黙っているのです、彼はもう一度同じことを繰返した。

「見せて下さいますか。」

私は相手の調子に引込まれて、つい変なことをいってしまった。私は決してその荷物を見たいために席を立った訳ではなかったのだけれど。

「喜んでお見せ致しますよ。わたくしは、さっきから考えていたのでございますよ。あなたはき

「つとこれを見にお出でなさるだろうとね。」

男は――むしろ老人といった方がふさわしいのだが――そういいながら、長い指で、器用に大風呂敷をほどいて、その額みtainなものを、今度は表を向けて、窓のところへ立てかけたのである。